英語リサーチペーパー執筆・指導のあり方

―問題点から提案へ―

黒澤　純子
KUROSAWA Junko

1. はじめに

学生は、これまでの学習の中で多かれ少なかれ、決められたトピックで意見や考えを論述するレポートや課題などの作成に取り組んだ学習経験を持っている。しかし、筆者が担当している「英語でリサーチペーパーを書く授業（Academic Writing Skills)」では、学期中、あるいは学期末に提出するレポートではなく、自身の問題意識の中から課題を探し、トピックを決め、そのトピックについての主張、仮説をたて、各自リサーチをして主張、仮説を論証するアカデミックリサーチペーパー（研究論文）を書くことを目指している。

筆者はこの授業を担当し3年目に入るが、毎年異なる学生が受講しても、リサーチペーパーの執筆にあたっての問題点や難しい事項には共通しているものがある。本稿では、学生にとってリサーチペーパーを書くにあたっての問題点や難しい事項について、アンケートの結果をもとに指導する上で重要なこと、そして指導者として学生への手助けとして可能な3つの提案について述べる。

2. リサーチペーパー執筆の過程

2.1　クラスサイズとテキスト

このクラスでは半期ごとにリサーチペーパーを書くための指導を行うクラスである。対象の学生は2年生で、初めてリサーチペーパーを書く学生で、前期は19名、後期は18名の登録で前期、後期各15回の授業で、半期ずつの授業登録も可能である。授業を登録している学生は、前期では800語から900語前後、後期では1200語前後のリサーチペーパーを仕上げていった。テキストは *Basic Writing Research Papers*（2018、以下、テキストと記す）を使用した。テキストの内容は、「リサーチペーパーとは何か」から始まり19のユニット（Unit）から成る初心者にとってもわかりやすいテキストと言える。Unit16以降は実験レポートの書き方が中心であった。担当のクラスでは実験を伴う内容のリサーチペーパーを執筆する予定がなかったため、筆者のクラスではリサーチペーパーの修正の方法を学ぶUnit15までを学習した。

テキストは基本的にはUnit1から順に学習したが、序論を執筆する段階で引用文献を使用する可能性があるため、引用の仕方、剽窃の問題については早い段階に学んだ。また、引用文献のリスト（APA形式）の作成も文献が出てくるたびに加筆を行うように指導した。引用文献のリストを提出期限前に短時間で間違いなく書くことは大変困難な作業であると講師が判断した結果である。その結果、各自が何度も文献リストに目を通して作成していくことができたので、APA形式の書き方においての間違いが次第になくなった。

2.2　リサーチペーパー執筆のための授業過程

2.2.1 トピックの決定について

前期では、初回の授業で各自が興味あるトピックについて学生に3つの案を出してもらい、講師が次の週までトピックの集計を行い、大きく4つの分野にしぼった。トピックの分野をしぼった理由は、学生にとって初めて英語で書くリサーチペーパーであるため、文献検索など、困った時に同じトピックを選択した学生たちが相談し合うことができるようにすること、また講師も文献の内容を把握しやすくするためでもあった。4つのトピックは環境問題、睡眠に関連する健康問題、食事と健康、音楽（主にK-POP）であった。リサーチペーパーの執筆に取り組むために文献を探し、執筆可能なトピックの内容へ絞り込みを始めた。

後期のリサーチペーパーのトピックについては、学生が自由に決めた。前期で学んだことを元に、限られた期限内で各自が興味あるトピックについて、前期よりもより深いリサーチを行って書くことを目標にした。

3. リサーチペーパーを執筆する上で学生が困難だと感じた問題点

この章では、テキストで学習する項目を8つに分け、各項目で出てきた問題点について述べる。また、第14回目の授業で行ったアンケートで、学生がリサーチペーパーの執筆過程で困難だと感じた事柄について記述があった箇所はそれについても言及する。

3.1　英語で書くことの難しさ

日本の学生は中学、高校の6年間一つの教科として英語を学習しているが、高校卒業までに、授業中ライティングを練習する時間が十分にはなかったのが実情である。長い文章を書くことをほとんどしたことがない学生にとって、自分の主張を論証するための文章を英語で書くこと

は大変に難しい状況であったと言える。英語という非母国語で論理的に考えることの難しさに加え、それを英語で書くことは大きな障害になったことは間違いない。Schramm-Possinger&Powers (2015) の言葉を引用すれば、非母国語で書くという行為は、論理的に思考して書くことの「言語の妨害」(“language block”, p.9.) になっていたことは否定できない。

3.2 主張 (Thesis statement)

リサーチペーパーで、thesis statement は自分の主張をはっきりと述べ、それを論理的に検証していくための根幹となる部分である。thesis statement を読むことで、読者はリサーチペーパーが何についてのものかがわかる。そのため、thesis statement を書く時は曖昧な表現を避け、明確な文にすることが重要だ。テキストでは thesis statement を書く上での注意点として、「句ではなく文にすること、疑問文にしないこと、エクスクラメーションマークを使用しないこと」とある (Kluge &Taylor, 2018, p. 36)。

アンケートでは、「thesis statement を考えること自体は難しいと感じなかった」という記述が大多数だった。しかし、「主張をひとつにまとめて、言い切るのが難しい」、「英語での表現方法がうまく思いつかなかった」という意見が補足されていた。また、「thesis statement を書いたことがないため、言葉の選択に苦労した」というコメントもクラスの約 3 分の 1 あった。

3.3 アウトライン

Thesis statement を書き、その主張を論証していくための論点の流れを組み立てる段階である。授業で使用しているテキストでは、Unit 6 で thesis statement の修正とアウトラインを考えることを同時に学んだ (Kluge &Taylor, 2018, p. 49)。授業内では、以前書いた thesis statement を元に、各自の thesis statement とアウトラインが相互に結びつくまで内容を修正していった。

実際には、この時点で thesis statement を論証していくための文献が揃っていない学生が大半であった。その結果、学生は文献の検索を進める一方で、文献の使用可能性の可否を考えながらアウトラインの修正を行った。

アンケートのコメントでは少数ではあるが、「自分の主張、仮説をどのように論じていくかの流れは他の項目よりも比較的困難なく進めることができた」という記述があった。

3.4 主張を裏付ける文献検索

前期、後期の両授業において、引用文献は本、ジャーナル、新聞、インターネットに出ている情報など自由に選んでよいことにした。ただし、インターネット上の情報や文献にだけ偏ることを避けるため、本 (日本語、あるいは英語) の文献を 1 冊含めることを必須条件とした。また、インターネット上の文献についても、省庁、学会など信頼できるサイトに掲載されている文献を参考にするように指示した。

実際、学生が使用する文献は前期、後期共に大半がインターネット上のものであった。昨今、学術専門雑誌や学会誌がデジタル化されていることが多い中、信頼できる情報源かどうかを見極めるために、学生が自身で判断できない時は、授業中に講師が必要に応じて学生と一緒に考える場面が多々あった。さらに、授業が 5 回終了した時点で文献一覧を学生に提出してもらい、講師が文献の記述の仕方の確認と同時に、使用可能な文献か否かの確認を行った。

アンケートのコメントでは、ほぼ全員が「キーワードを使ってインターネットでの検索は簡単だったが、自分の主張を裏付けしてくれる文献かどうかを確認する時間かかって大変だった」と記述していた。

3.5 序論 (イントロダクション)

説得力のある序論とは、Interesting Opening, Background, Thesis Statement, Plan sentence の 4 つの部分 (Kluge &Taylor, 2018, p. 72) から成っている。授業では、主張 (thesis statement) を元に、その主張を論証していくための手順として plan sentence をしっかり書くことに重きを置いて指導した。しかし、イントロダクションを学生に提出してもらったところ、前期、後期の両学期においてリサーチペーパーでは学生の主張やリサーチによって検証していく内容を明確にしていない学生が多くいた。序論の後半部分では、リサーチペーパーで調べていく内容を紹介する、あるいは自分の主張とリサーチした結果の内容を比較する、という文章で終わっている学生が大半であった。

リサーチペーパーを執筆する中で、自分の主張について検証する (examine)、分析する (analyze)、議論する (discuss)、解明する(clarify)などの重要な動詞が使用されておらず、その結果、読み手側からするとリサーチペーパーというよりもレポートの序論のように締めくくっている印象を受けた。

アンケートのコメントの中で複数の学生が回答していた内容を以下に挙げる。「読み手に興味を持ってもらえるような書き出しの一文を書くのに時間がかかった」、「リサーチペーパーの導入に必要な背景知識を入れて書く難しかった」、「問題提起、問題のアプローチの視点の述べ方を簡潔に英語でまとめることが難しかった」が大半の学生の感想だった。

3.6 剽窃を避ける引用の仕方

文部科学省(n. d.)の定義によると、盗用とは「他の研究者のアイディア、分析・解析方法、データ、研究結果、論文又は用語を、当該研究者の了解もしくは適切な表示なく流用すること」である。授業ではこの定義を念頭に入

れること、また盗用した場合の罰則は授業だけではなく、大学の中でいかに厳しく罰せられるかについての説明を実例を挙げて行なった。

引用の出典を記すことで 盗用は避けることができる。専門家の文献なしではリサーチペーパーにおいて自身の主張や仮説を証明していくことは不可能であるため、正しい引用、あるいは出典を記して言い換えをすることはリサーチペーパーを書く上で重要である。

授業ではテキストを使用し、具体的に文献引用の情報をリサーチペーパーの本文に引用する方法を学んだ。テキストにある32の例文(pp.100-103)すべてを確認した。その後ジャーナルに掲載された論文のコピーを配布し、練習問題として引用の仕方の練習を5題行った。最後に、各自のリサーチペーパーの中で文献の引用や、引用の表記は正しくできているかの確認を行なった。練習問題ではクラスの全員が同じ問題に取り組むため、正しく引用できていたが、各自のリサーチペーパーでの確認では練習で理解していたはずのことができなくなっている場合もあった。テキスト上での理解と実践には乖離があったため、引用の仕方を学ぶ時間を増やすことが必要だと感じた。またこの段階で、学生本人だけでなく指導者が注意をして確認を行うことが必要だと実感した。

アンケートでは、学生全員が今まで盗用や剽窃(plagiarism)という概念を持っておらず、その重要性について知らないことがわかった。その原因は、学生にとって今までリサーチペーパーを書く機会がなかったため剽窃について、あるいは引用の情報源を明確に示すことの重要性を深刻に考えていなかったことがわかった。

3.7　引用文献の書き方

APA 形式で引用文献の書き方の例はテキストを元に学び、補足のために配布したプリントを参考にして、実際学生が使用する可能性の高い文献（インターネット上のサイト、本、学会誌、オンライン新聞、オンライン辞書など）のリストを作成した。基本となる文献リストを作成した後はリサーチペーパーを書き進める過程で必要になった文献は随時加えていくことを目標とした。最後にすべての文献を一から作成することは大変な仕事となる可能性があり、また間違いを探すことも困難になるためである。

問題点は、文献リストの例を見て理解しているつもりでも、実際各自が文献リストを作成してみると、著者名のあとのピリオド、本や雑誌名をイタリックにしていない、ページの書き落とし、ホームページを明示していない、など枚挙にいとまがないほどのミスがあった。作成の過程で文献リストの提出を最終原稿提出前に2回行なったが、上記の内容のミスが毎回すべての学生に複数件あった。講師が同様の間違いを何度修正しても、執筆者が自分でミスを見つけることができなければどうしようもないことがわかり、添削指導は2回で終了した。

3.8　結論

結論では、序論で述べた主張を本論で文献を示し証明したこと、そしてそれらをまとめ上げる場である。その時、主張を同じ言葉で繰り返すのでなく、表現を変えて述べ、興味深い結論にすることが必要である（Kluge &Taylor, 2018)。しかし、非母国語の英語で書くということが障害となり、主張の言い換えや表現を変えることが難しいと感じる学生が大半だった。さらに、本論で書いた内容の重要な箇所をまとめて述べることにも学生は苦労していた。

実際に、本論で述べたことには触れずに簡単に結論を書いて終了しているリサーチペーパーも半数ほどあった。中には、イントロダクションで述べた thesis statement について言及することもなく、自身の希望的観測や意見を 3 行から 5 行にまとめて結論としていたリサーチペーパーも後期の授業の 18 人のうち 4 件あった。このような結果につながる大きな理由は、リサーチペーパー執筆の経験が少ないために起こるリサーチや授業外での文献の読み進めの遅れ、執筆時間の不足、規定の語数や提出期限の制限により結論を簡単に終わらせたからである。その結果、テキストで述べられているような理想的な結論を書くことができなかった学生もいた。しかし、初回の授業で最終稿の提出日はもちろん、アウトライン、イントロダクション、引用文献リスト（2 回)、第一稿の提出日の期限は書面で告知してあったので、そのスケジュールに則り、リサーチの計画を進めていくことは学生にとって大きな責任でもあると考える。

以上、授業の内容を総括し、かつ 14 回目に行ったアンケートによる学生の回答を検討すると、リサーチペーパーを書く過程で各学習項目に共通している問題は、言語が英語で論理的に書くことが一番困難であったことがわかった。非母国語で 1200 語前後の長さのものを執筆したことがない学生にとってはこの結果は当然と言える。

4. 結論

前頁まではリサーチペーパーを執筆する過程順に学生が学んだ内容、そして困難に感じたことについて項目ごとに述べた。それらを踏まえ、ここの章では、学生が書きたいと考えているリサーチペーパーに仕上げていくために、指導者ができる 3 つの提案について述べる。

一つ目の提案として、指導者は授業中に学生の質問に平等に答えること、また指導者側からも学生の質問を促すことである。可能であれば、その場でアドバイスを行うことが重要である。毎回の授業を大切にしていくことを心がけ、学生が書こうとしているリサーチペーパーの内容についてより深く考えることができるような指導者側からの手助け（scaffolding [注1]）が必要だ。

二つ目の提案として、草稿執筆の途中段階での原稿提出とフィードバックを行うことを提案する。これにより、指導者は学生がどこまでリサーチを行い、どのような執筆段階にいるかを把握することができる。

また時間的に可能であれば、1 対 1 の個人指導の時間をとり、学生各自が必要とする指導やアドバイスを行いたいと考える（Harris, M. Teaching One-to-One: The Writing Conference）。その理由としては、教室内を講師が巡回して個別の質問に対する指導やアドバイスも可能ではあったが、すべての学生が自発的にアドバイスを求めることができるわけではないことがわかった。他の学生がいる中で質問することに遠慮があるかもしれないからである。個人指導の一つの方法として、昨今普及しているオンラインによる個人指導で学生にとって "a risk-free classroom environment"（Williams, 2001, p. 752）の環境を提供できることも今後の課題として考えたい。また、指導を受けている学生と指導者の会話が周辺にいる学生の原稿執筆の妨げになることも今後考慮すべきことだ。

最後の提案として、カリキュラムについての課題を挙げる。リサーチペーパーを書く授業の前に、学生はライティングの学習を授業の内外で十分にしておくことは必要である。授業で学習する場合は、書いたものに対してフィードバックが十分なされる授業が望ましい。その後、初年度教育としてのリサーチペーパーを書く授業が 1 つだけで終わるのではなく、次年度以降も継続してリサーチペーパーを書く選択科目があるカリキュラムが必要だと考える。

そして、毎回の授業で積み上げたことを基礎として、学生が自らの力で、今後自分がたてるテーマの先行研究や文献調査にさらに一歩踏み込みながら、専門家の意見を自分の考えと絡ませ議論できるリサーチペーパーの良き書き手になれるように、私たち講師は指導者として、また良きアドバイザー(Nicosia, A. &Stein, L., 1996)としての役割を担っていきたい。

注

1 元来は建築用語（意味：建築現場などの足場、足場材料）であるが、教育では「初心者、あるいは未熟な生徒が一人で到達できない、解決できないことを熟練者（教師）が手助けをして生徒を到達地点や問題解決に導く過程」（Boyd & Maloof, 2000, p. 185）のことを指す。

参考文献

Boyd, M. & Maloof, V. M. (2000). How teachers can build in student-proposed intertextual links to facilitate student talk in the ESL classroom. In J. K. Hall & L. S. Verplaetse (Eds.) *Second and foreign language learning through classroom interaction* (pp. 163-182). London: Erlbaum.

Harris, M. (1986). *Teaching One-to-One: The Writing Conference*. Urbana, IL.: The National Council of Teachers of English.

一橋大学英語科（2015）．『英語アカデミックライティングの基礎』Retrieved from https://www.kenkyusha.co.jp/uploads/samplebook/new/32742194.pdf (2023-1-10)

Kluge, D. E. &Taylor, M. A. (2018). *Basic Steps to Writing Research Papers*. Tokyo: Cengage Learning K. K.

Ministry of Education, Sports, Science, and Technology (MEXT). (n. d.). Kenkyu katsudou no fusei koui nado no teigi Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutsu/gijyutsu12/houkoku/attach/1334660.htm (2022-11-20)

Nicosia, A. &Stein, L. (1996). The Role of Teachers and Students in Academic Writing Tutorials: A classroom Based Study. *JALT Journal, 18* (2), 297-313.

Schramm-Possinger, M. E. & Powers, D. E. (2015). The First Year of Graduate Study: Informing Ways to reduce Attrition. *ETS. Research Memorandum*. 1-16.

Williams, J. A. (2001). Classroom conversations: Opportunities to learn for ESL students in mainstream classrooms. *The Reading Teacher, 54* (8), 750-757.

表 1 授業シラバス（半期）

授業の回数	授業内容
第１回	トピックを決める
第２回	リサーチの方法、Thesis statement を考える
第３回	Thesis statement の修正、アウトライン
第４回	Reference List の作成、Plagiarism について
第５回	アウトラインの修正、タイトルを考える
第６回	Introduction を書く
第７回	Body（本論）を書き始める、同時に Reference List の修正、追加
第８回	再度 Plagiarism について、引用の仕方の練習、Body の執筆
第９回	Accuracy, Logic, Relevance について
第１０回	Conclusion
第１１回	Conclusion と Introduction との整合性
第１２回	Reference List の最終確認
第１３回	プレゼンテーション
第１４回	個人指導（一人 5 分）
第１５回	プレゼンテーション

Kluge, D. E. &Taylor, M. A. (2018). *Basic Steps to Writing Research Papers* からの学習内容を選択した。